

学校法人常磐大学 広報誌 TOKIWA POST [トボス]

# Topos

vol. 70  
Dec. 2013



## 常磐大学 & 水戸ホーリーホック コラボデー2013

地元Jリーグチームと連携して地域社会の活性化を図るコラボデーが8月25日に開催されました。

今年は昨年度の来場者数(3,263人)を大きく上回る5,609人の観客を動員。学生や生徒、園児たちは、それぞれの役割をしっかりと果たし、スタジアムを盛り上げました。



# Jリーグ 常磐大学 & 水戸ホーリーホック コラボデー 2013

## 高校 女子サッカー部 「エキシビジョンマッチ」



強敵、水戸第三高等学校と対戦し勝利  
ケースデンキスタジアムは施設がとてもきれいで、ピッチに立つと視界が広く感じられました。応援してくれる人の姿もよく見え、その分緊張もしましたが、Jリーグのスタジアムで試合ができることがうれしく、試合前の練習も集中できていました。対戦する水戸第三高等学校は、春に1対0で負けていたので、夏休みは勝つための準備に集中し、それが出し切れたことがよかったですと思います。後半集中が切れてしまったことが反省点で、今後の試合に生かしたいと思っています。学校の名前を背負っているという思いもあり、先輩や保護者の方々の前で楽しくプレーし、勝てたことそして、女子サッカー部の存在をアピールする機会が得られたことに感謝しています。



横須賀 汐那  
常磐大学高等学校 2年  
女子サッカー部 部長

## 高校 チアリーディング 「ダンス披露」



みんなに元気を届ける笑顔  
チアの活動は野球部の応援が中心ですが、イベントなどの出演依頼には積極的に応えています。コラボデーは中でも大きな舞台で、全員で成し遂げる喜びを味わえたことは、思い出すだけで楽しくなるような経験でした。直前の8月初旬には黄門まつりにも参加したため、練習の時間は決して多くなかったのですが、振り付けを覚えるだけでなく、みんなの動きをそろえることには、レベルの高いパフォーマン스가できるように練習を重ねました。演技を終え、観客席からたくさん拍手をいただいたときは練習をがんばってきたよかったと思えました。私たちのチアスピリットで皆さんに元気を与えられたのだとしたら、出演したかいがあったと思います。



根本 真衣  
常磐大学高等学校 3年  
チアリーディング リーダー

幼稚園

## 「エスコートキッズ」



### 子どもたちの目の輝きが印象的

子どもたちは事前に選手の顔や名前を予習していたこともあり、プロのサッカー選手を間近に見て、目をキラキラさせていました。大役を終えた後は「選手がかっこよかった」「手が大きかった」「サッカー場がすごく広くてびっくりした」「芝がきれいだった」と興奮した様子で話してくれました。また、今年にはサブ企画にシールド大会があったので、多くの子どもがピッチに立つことができてよかったと思います。保護者の方の中には、イベント後、誘い合って応援に行ったりもしていると聞きました。こうしたイベントは、地元チームへの愛着が生まれる良いきっかけになります。年中さんたちは「次は自分たちの番」と楽しみにしているので、ぜひ来年も機会をいただけたらと思います。



小野寺 郁恵 先生  
常盤大学幼稚園  
年長組 主任

大学・短大 サッカー部

## 「一緒にサッカーしよう！」



サッカーを楽しむ気持ちを再確認  
私たちサッカー部は、観戦に来た子どもたちとのミニゲームを企画し、試合前にサブグラウンドで、小学校1年から6年生までの子どもたち約40人と汗を流しました。子どもを相手に戸惑う部分もありましたが、全力でプレーすることを心がけ、子どもたちが夢中でボールを追う姿からサッカーを楽しむ気持ちの大切さをあらためて教えられました。また、Jリーグの試合運営をわすけながら手伝えたことも貴重な経験でした。試合前の選手の集中力やピッチに向かうときの闘志などはとても刺激になります。多くの人に常盤大学サッカー部をアピールするチャンスなので、「家族、野心、集中」というチームのコンセプトを伝えるためにもぜひまた参加したいと思っています。



額賀 達也  
人間科学部 コミュニケーション学科 3年  
サッカー部 主将

大学 人間科学部 健康栄養学科

## 「夏バテ知らずのカラダづくり応援隊」



### 食中毒防止&夏バテ対策のチラシを配布

私たちは夏バテ知らずの体をつくる栄養の知識と、夏場に多い食中毒への注意を促すチラシを作り、会場で配布しました。スタジアムには子どもたちから高齢者まで幅広い層の方が来られるため、言葉づかいやイラストなどの表現には特に気をつけました。ちよつと熱中症の話がニューラスにぎわせていたこともあり、私たちのチラシを読んでも「なるほど気をつけよう」「今まで意識してなかったことに気づけた」などの感想をいただき、工夫を重ねたかがありました。私が目指している栄養教諭は、こうした情報発信も重要な仕事です。多くの人に、分かりやすく栄養の大切さを伝えようと努力した今回の経験を、将来のために役立てたいと思っています。



石戸 利幸  
人間科学部 健康栄養学科 3年

智学館 サッカー部

## 「フェアプレーフラッグベアラー」



### フェアプレーを誓う旗と入場

選手、審判団に先駆けて最初に入場するのがフェアプレーの象徴である黄色いフェアプレーフラッグです。今年もその役割を智学館中等教育学校サッカー部の生徒がまっとうしました。

高校 男子サッカー部

## 「ボールパーソン」



### サッカー部の生徒16名が活躍

フィールドの外に出たボールを回収し、選手に手渡すのがボールパーソン。プロの試合を間近に見るチャンスでもあり、サッカー部の生徒たちはゲームの流れをスムーズにする大切な仕事をキビキビとこなしていました。

大学・短大 吹奏楽団&TOKIWAおんぶの会

## 「吹奏楽合同演奏」



### 音楽で雰囲気は最高潮

吹奏楽団とそのOBOGによる合同楽団も登場。エキシビジョンマッチ中の演奏に始まり、水戸ホーリーホックとコンサドーレ札幌、両チームの選手入場の際も、生演奏でスタジアムを盛り上げました。

# 経営学科の学生による イベント企画を 振り返って



## 「ホーリング」

サッカーにボウリングの要素を取り入れた新感覚のゲームイベント。客層は子どもたちをターゲットに設定し、キックボウリングを楽しむことでサッカーに関心を持ってもらうことが目的。予想を超える参加者数のため、景品が足りなくなるなどのトラブルもあったものの、企画としては効率よく進行できたと振り返りました。また、「グループで協力して一つのプロジェクトを行う中で協調性を磨くことができた」という成長を実感した意見や「企画した通りに運営するのはとても難しい。次の機会にはもっと入念に企画を練ることが必要だ」などの前向きなコメントが聞かれました。



## 「初ヘディング当て」

試合で最初にヘディングをするホーリーホックの選手は誰かを当てるイベント。ターゲットは小学生とその保護者で、投票を通じてホーリーホックの選手の名前とポジションを覚えてもらうことが企画の狙いでした。想定参加者数200人に対し、2倍の約400人の投票を集めることができた結果について、企画内容をしっかりと説明できた成果だと振り返り、ホーリーホックの選手の名前を覚えてもらうことで、チームへの親しみを深めることに貢献できたと総括しました。ハーフタイムに当選者3人を電光掲示板で発表する際も臨機応変な対応によってスムーズに進行できたようです。



今年で4年目を迎えた「常磐大学&水戸ホーリーホックコラボデー」では、国際学部経営学科の「マーケティング実習」を履修する学生たちがイベントの企画運営を担当しました。コンセプトは「来場者に楽しんでもらい、スタジアムにまた来たくなるようなイベント」。7つのチームが企画を練り、5月には水戸ホーリーホックの職員の方を前にプレゼンテーションを行いました。その後、実現の可能性などを検討し、キックターゲットやフェイスペイントといった恒例の企画に加え、観客の手形による応援横断幕の作成や常磐大学のサッカー部、放送研究会などから協力を得るなど、これまでにない企画も実行されました。チームでの役割分担や必要な物品の割り出しと調達、プロモーション活動などについて準備を進め、ほぼ手作りで臨んだ8月25日のコラボデー。当日はシーズン平均入場者数より約1,000人多い、5,609人の入場者があり、盛況のうち幕を閉じることができました。10月のまとめ授業では、水戸ホーリーホックの沼田社長をお招きして激励をいただき、当日の結果を振り返って、さらにより良いイベントにするための検討が行われました。学生からは「自分たちが企画したイベントに参加者から『楽しい』という言葉を聞くことができ、プロジェクトをやって本当に良かった」「チームで目標を達成する大変さとやりがい理解できた」という感想がありました。水戸ホーリーホックの職員の方からも講評と励ましのメッセージをいただき、プロジェクトを通して、さまざまなことを学んだようです。ここでは、その授業でのチームごとの振り返りをレポートします。

## コラボデーの教育効果

### 社会の課題を引き受ける責任



北根 精美 教授(右)  
村中 均 助教(左)  
国際学部 経営学科

コラボデーのイベント企画・運営は「マーケティング実習」の授業の一環です。企業や自治体が直面する現実の課題に挑み、さまざまな気づきや成長を得ることが目標です。前期のテーマは、水戸ホーリーホックの観客動員数を伸ばすことでした。どうすれば子どもや大人、ファミリー層が楽しく過ごせ、また来たいと思ってもらえる企画ができるか。学生は4〜5人のチームに分かれて、先輩たちの例を振り返り、他のプロサッカーチームの活動も調べながら、自分たちのプランを検討しました。大事なのは社会とかかわっているという緊張感で、学生も次第に責任の重さを自覚していきます。

### 発想や実行力を身に付ける

動員目標を決め、その達成を目指すと同時に、グループワークを通してコミュニケーション能力や主体性、協調性を養うことも授業の狙いの一つです。自分の意見を主張しつつ、メンバーの考えも受け入れ、協調して目標を達成する。それらはすべて社会で求められる力であり、これを身に付けるためには、やはり実践が有効です。企画から実施まで、すべて自分たちの力でできる授業ですから、発想や実行力を試してみたい人はぜひ参加してほしいと思っています。



### 「届けメッセージ・バルーンゲート」

来場者の方々に、風船に応援メッセージを書いてもらい、その風船を使って選手入場の際のアーチをつくるという企画。サポーターの思いを一つにして、ホーリーホックの勝利を後押しすることが狙いでした。多くのサポーターにその趣旨を賛同していただき、小さな子どもたちから大人まで、多くの人から選手やチームへの応援メッセージが集まりました。メンバー全員が一丸となって取り組むことができたこの企画、「もっと話し合いを綿密に行うべきだった」などの改善意見もあった一方、「チームでつくったプランがそのまま現実に反映されたことに感動した」「チームでイベントを企画する楽しさを知った」などチーム力を強調したコメントが多く聞かれました。



イベントの盛り上げに  
野外放送を企画。



臨時バスの増発も提案しました。



### 「わくわくホーリーシュート大会」

常磐大学幼稚園園児による実際のピッチを利用したシュート体験企画。夢中でボールを蹴るサッカーキッズたちの姿を通して、サッカーの魅力を伝え、会場を盛り上げるのが狙いでした。試合開始前の熱気あふれるスタジアムのピッチに立ち、サッカーができるという企画は、園児も保護者の方も満足していただけだった様子。また、観客にも大好評で、会場は大いに盛り上がりました。反省点は、企画として子どもたちの写真撮影を想定していなかったこと。あらかじめ時間を設けてセッティングしておけばよかったと振り返りました。



### 「手形で作ろう！ 応援メッセージ」

青のインクで「ガンバレ」の文字になるよう来場者に手形を押してもらい、選手への応援メッセージもあわせて記入してもらうことで、ホーリーホックのチームカラーである青い横断幕をつくるというイベント。ターゲットは全世代、特に子どもたちでした。「予算の制限がある企画の大変さを知った」「手が汚れてしまうので、敬遠されてしまったかもしれない。そういった気配りもできるようになりたい」という意見や「まず、結果を予測して行動できるようにになった」「プレゼンテーションの能力が身に付いた」という感想も聞かれました。横断幕は限られた時間の中で完成させることができ、多くのサポーターが見守る中、選手入場の際に披露することができました。



### 「親子で楽しむホーリーターゲット」

親子や友人2人組で協力し、ボールを蹴ってゴールに設置したターゲットを狙う企画。こちらのゲームもイベント開始から、試合が始まる直前まで多くの人で列ができたイベントとなりました。親子などのペアで参加していただけるよう企画していましたが、実際にやってみると、個人参加のお客さまが多く、「来場者のニーズと自分たちの狙いに相違があった」と振り返ります。しかし、「子どもたちが自分の作ったゲームを夢中にやってくれたのがうれしかった」という感想もあり、来場者に楽しんでもらい、その流れで試合観戦に行ってもらおうという目標達成の手応えも語られました。



### 「フェイスペイント」

コラボデー恒例の人気イベントで、応援に一体感を出すことが狙い。ホーリーホックのロゴやホーリーくんといった型の中から参加者に好きなものを選んでもらい、ペイントを行いました。特に子どもたちに大人気で、イベント開始から参加者が途切れることはありませんでした。想定していた以上に集客があり、しかも短時間に集中したため、長い列ができてしまったことが反省点とし、「一人が一つの柄のペイントを担当する、簡単なペイントはスタンプにするなど、もっと効率化を図りたい」「子どもの腕に合わせた小さいサイズも必要」などの改善案とともに、お客さまとコミュニケーションがとれ、試合を盛り上げることができた達成感も語られました。



若い発想に期待しています

**日常的な感覚で新しい発想を**  
私たちはサッカークラブの職員であり、どうしてもサッカーという固定観念にとらわれがち。その点、学生の皆さんには、日常的な感覚で考えられる自由があります。今、はやっていることは何か、より多くの若者が求めているものは何なのかという、リアルな視点を取り入れるとなお良いのではないのでしょうか。今後はコラボデーに限らず、コミュニケーションの機会を設けて、活発に議論をしたい。例えば突拍子もないアイデアでも、その発想の元にあるものを確かめながら、意見を交換していけばアイデアを力太りにする方法がきっとあると思います。



佐藤 秀一さん 営業部(右)  
檜崎 裕史さん 運営広報部(左)  
水戸ホーリーホック

### 地域の学生による特別な1日

このコラボデーは今年で4年目を迎えます。学生の皆さんのアイデアは年々良くなっていると思います。先輩の企画を継承している部分と新しい企画とがミックスして、多くのお客さまが特別なイベントが行われていることに注目し、楽しんでくださっていたと感じています。特に子どもたちは、お兄さんお姉さんと接することを喜んでいるでしょうし、地域の学生が地域の子どもたちを巻き込むこと自体に意義があると思います。

# News and Topics

学生、生徒、園児たちは日々学び、経験し、成長を続けています。  
このページでは学校法人常磐大学の各学校の取り組みやイベントの様子をはじめ、  
日々の活動とその成果をお知らせします。

## 高校

サマーキャンプに参加した生徒たちが  
海外でさまざまな体験をし、  
ひと回り大きく成長して帰国しました。

8月17日から8月30日までエドモントン(カナダ・アルバータ州)にあるハリーエインリー高校で、本校生徒19人がサマーキャンプに参加しました。サマーキャンプでは、学校での英語の授業に加え、カナディアンロッキーでハイキングをして、自然や文化を肌で感じてきました。ホームステイ先では家族の一員として迎えられ、一緒に宿題をしたり料理を作ったり思い出がたくさんできました。「3か月プログラム」に参加した生徒5人は、引き続き11月14日までホームステイをしてハリーエインリー高校に通い、11月16日に帰国しました。カナダに住むさまざまな国の人と触れ合うことで、英語でのコミュニケーションがスムーズに取れるようになり、視野が日本から世界へと広がりました。



## 幼稚園

年長さんしか経験できない  
「宿泊保育」が今年も開催されました。  
楽しい2日間あっという間でした。

7月30日と31日の2日間、みんなが楽しみにしていた宿泊保育を行いました。「園内探検スタンプラリー」や「ペインティング」で盛り上がり、プールにも入って、おいしいカレーライスを食べた後は、「キャンプファイヤー」です。みんなで火を囲み、お話を聞いたり、歌ったり踊ったり…。線香花火も登場し、子どもたちの表情はキラキラと輝いていました。心配していた就寝時も、ほとんどの子どもたちは落ち着いて眠りにつきました。あっという間の2日間でしたが、子どもたちも幼稚園にお泊まりができてとってもうれしそうでした。大好きなお友達や先生たちと一緒に、どんなことでも大丈夫。みんなで過ごしたことをいつまでも忘れないでほしいと思います。



## 大学

コミュニティ振興学部の横須賀ゼミ生たちが  
川越市の学生政策コンペティションで  
川越市長賞を受賞しました。

9月28日に開催された「公共政策フォーラム2013in川越 学生政策コンペティション」において、コミュニティ振興学部の横須賀徹ゼミの学生を中心としたメンバー「地域政策研究会」が最上位に相当する川越市長賞を受賞しました。テーマは「地・産・学連携によるコミュニティデザイン～まちなかガイドシステム『街知(まちしる)』の構築～」。水戸市や笠間市の中心市街地に若者を呼び戻すため、簡単にまちなかの最新情報を得ることができるスマートフォンアプリを開発し、多くの人にまちの魅力を知ってもらおうという試みです。今後は、IT企業や自治体と打ち合わせを重ね、アプリの改善や本格運用に向けて調整を進める予定。地域政策研究会の活動から目が離せません。





大学・短大

### 第6回常磐大学TOEFL®iBT準備コースを開講。 少人数制の短期集中クラスで 留学に必要な実力を身に付けました。

8月19日から30日まで「第6回常磐大学TOEFL®iBT準備コース」を開講しました。今回の受講者は22人で、本学の学生だけでなく他大学の学生や県内学校の教諭も参加してくださいました。参加者からは「ネイティブの講師の方たちがとても熱心に教えてくれてありがたかったです。伝えたいことをどう構成するのがよくわかりました」「TOEFL®iBTがどのような形式であるのか、その形式に対する対処法などをとても丁寧に分かりやすく説明していただき最後までがんばれました」「Speakingの能力が上がったように感じました」などの感想が寄せられました。次回は2014年2月～3月に実施する予定です。



大学

### 那珂湊の商店街を ワークショップで活性化。 地域交流の大切さを実感しました。

那珂湊地区の活性化を目的に、地元商店主たちの手で行われている夜のバザールが「ドゥナイトマーケット」。毎月さまざまなイベントが繰り広げられている場で、8月17日、人間科学部の中村泰之ゼミと石田喜美ゼミの学生たちが、「TOKIWAまちなかラボ」を開催しました。中村ゼミは、小さな箱の中に紙ねんどで那珂湊の海を表現するワークショップ「夢のおさかなをつくろう!」を、石田ゼミは海岸にある石にペイントしたりすることで、世界に一つだけのオリジナル・ペーパーウェイトを作る「石のペーパーウェイトをつくろう!」などを企画。学生たちの指導のもと、子どもたちを中心とした地域の方々が一と夏の思い出づくりを楽しんでいました。



智学館

### 初めて6学年そろったフェスティバル!! 各学年が「LINK」して 展示、映画、ライブで盛り上がりました。

9月14日・15日、「智学館フェスティバル2013」を開催しました。隔年で行われるこの行事、前回は1～4年次までの参加でしたが、今回は初めて6年次までの全年次がそろって盛大な催しとなりました。これに関連して総合テーマは「繋～LINK～」。初日を校内発表、2日目を一般公開とした2日間での部活、クラス、有志による展示、映画、ライブパフォーマンスを満喫しました。模擬店では智学館としては初めて、生徒が自分たちで調理したパンケーキやカレーなどの料理を提供し、雰囲気を盛り上げました。台風18号の影響で開催時間を短縮した2日目も、400人を超す方々にご来校いただき、悪天候にも負けず大盛況となりました。



大学

### 沢渡川流域を利用し、地域に暮らす人々が 持続可能な地域づくりに参加できる 環境教育プログラムの開発を進めています。

人間科学部では共同研究「環境教育プログラムの開発」を2011年度から3か年計画で進めています。子どもから大人まで、地域の人々が身近な環境である「沢渡川」を体感し、当事者として考え、協力して行動することが目標です。今回は小関一也准教授が中心となり、8月5日と9日の2日間にわたって、大学脇に広がる沢渡川周辺を観察する活動を行いました。常磐小学校の児童約20名のほか、保護者の方々、水戸土木事務所の職員の方々、本学学生が参加。1日目は主に、沢渡川流域を歩いてポイントを記録する「五感マップづくり」を行い、ワークショップも開催。2日目はゴミ拾いをして、最後に気に入ったポイントをみんなで選び、記念のベンチを設置することになりました。

ブフォーラム」が毎年開催されます。今年度、本校からは4名の生徒が参加しました。与えられたテーマについて英語で自由に会話を楽しみながら、和やかな雰囲気の中で大会は進められました。伝えたいことをうまく英語で表現できずに苦労した場面もありましたが、日頃の練習の成果を十分に発揮し、2年次松山実玖さんが水戸地区大会に、5年次安達諒子さんが県大会に見事進出を果たしました。



幼稚園

**年齢に応じたカリキュラムで英語が楽しく身に付く「ハローイングリッシュ」。**  
子どもたちは毎回楽しみにしています。

トゥール先生と楽しく英語を学ぶ「ハローイングリッシュ」。小学校の英語教育にスムーズに対応できるプログラムを行っています。5月の連休明けからスタートした年中さんたちも英語遊びに少しずつ慣れてきて、数字や形の名称を英語で発音してみたり、体を動かしながら歌を歌ったりと楽しい時間を過ごしています。トゥール先生の豊かな表情や表現で子どもたちは終始笑顔。年長さんも回を重ねるごとに、先生や友達に、覚えた英単語で積極的に話しかける姿も見られています。次回はどんな英語遊びを紹介してくれるのでしょうか。楽しみです。



大学

**「全日本中国語スピーチコンテスト茨城県大会」の朗読部門で優秀賞！**

人間科学部現代社会学科の白田依里佳さんが、10月6日、日中友好協会主催「全日本中国語スピーチコンテスト第11回茨城県大会」の朗読部門に出場し、見事優秀賞を受賞しました。大学で初めて中国語を学んでとても興味を持ち、今の実力を試してみたいと思って大会に参加した白田さん。本番までの2か月間は授業時間外も先生に質問しながら発音などを徹底チェックしたそうです。当日は緊張しながらも楽しんで発表できたという白田さんは「来年はさらにスキルアップして『スピーチ部門』にも挑戦したい」と抱負を語ってくれました。



高校

**「水戸の萩まつり」に茶道部が参加。**  
残暑厳しい借楽園で一服の涼を届ける  
高校生野点茶会を開きました。

中秋の名月を間近に控えた9月14日、水戸観光協会主催の「水戸の萩まつり」において、高校生野点茶会が開かれました。今年は常磐大学高等学校の茶道部が担当し、借楽園の藤棚で、立礼式による薄茶とお菓子を楽しんでいただきました。萩まつりを楽しみに訪れた観光客の方やご家族連れ、近隣の小中学生や高校生、さらには茶道関係者など、多くの方々に無料で呈茶をしました。残暑厳しい中、テントの水屋で汗をかきながら、10時から3時までの5時間で12回のお点前をし、来場者の皆さまにひとときの涼しさを感じていただきました。



大学・短大

**「常磐大学第60回体育会総会」が開かれ  
体育会の各部員が一堂に会しました。**

7月31日、常磐大学T棟学生ホールにおいて「常磐大学第60回体育会総会」が開かれました。体育会の各部員たちが集い、戦績報告などが行われ、次期の活動に向けて英気を養う場となりました。常磐大学では、課外活動は正課授業とともに学生の成長を促す大切な学びの場と考え、2013年度から5団体を強化部に指定し、活動支援を行っています。これからも体育会各部の活躍にご声援をよろしくお願いいたします。



智学館

**他校の生徒とも自然に友達になれる  
「英語インタラクティブフォーラム」で  
日頃の練習の成果を発揮しました。**

茨城県では、双方向性を重視したコミュニケーション能力を高めることを目的として「英語インタラクティ



短大

**「NHKのど自慢」in常陸大宮でキャリア教養学科2年の赤城つくみさんがチャンピオンに輝きました！**

20歳の記念に祖母に歌を届けたい。その思いが通じたからか、何千通という応募はがきの中から、見事予選の出場権を獲得。その後は原曲を何度も聞いては、繰り返し練習したそうです。オンエア前日に行われた予選では250組中20組という狭き門を突破し、いよいよ8月25日当日。本番前、スタッフの方が和ませてくれたのであまり緊張はしなかったとか。練習の成果を発揮し、見事、チャンピオンの座を射止めました。来年の春には就職が決まっている赤城さん。歌うことは趣味として続けていきたい、と語ってくれました。



幼稚園

**夏休みの一大イベント「夏祭り」。**荒天にハラハラしつつも空に願いが届いて、無事に開催できました。

7月27日、夏祭りの朝は大雨と雷という大変な悪天候で一時は開催も危ぶまれましたが、みんなの願いが空に届き、無事に行うことができました。園庭での始め式は、急遽遊戯室での実施となり、年長さんの最初の言葉でいよいよ開催です。スーパーボールすくい・くじびき・ベンシルバルーン・ヨーヨー・わなげ・おぼけやしき・なかよしシアター、どのコーナーも行列ができて大盛況!! ご家族と一緒に参加する姿が見られ、みんなたくさんのお土産を持っての降園となりました。また一つ、素敵な夏の思い出ができました。



智学館

2年次生がいつもよりたくましく感じられた2日間。常陸大宮市に自然探究旅行に出かけてきました。

7月12日・13日、2年次生が1泊2日の自然探究旅行に出かけました。場所は常陸大宮市の旧緒川村です。1日目の朝はあいにくの曇り空でしたが、山に登る頃には雲の間から日が差してきました。蒸し暑さの中でも、木陰でみんなと仲良く食べるお昼ご飯はとてもおいしく、すぐに充電完了！お昼の後は、グループに分かれて植物採集。水戸では見ることのできない植物を採取して写真に収めました。事後指導では夏休みを利用してそれらをレポートにまとめました。協力し合って行動する姿はいつもよりひとまわり大きく見えました。



大学院

開設10周年を迎えた国際被害者学研究所がJICAの受託事業として紛争地域支援のためのコースを開設しました。

常磐大学国際被害者学研究所では2011年度から3か年事業として、JICA筑波国際センターからの委託を受けて、「紛争被害者のための支援システムの開発」コースを開設しました。コロンビア、ネパール、スーダンの行政担当官やNGOの関係者など計9人が参加し、自国の紛争被害者支援のための行動計画を作成し、所属組織での承認を得た後で、確実に構想計画に基づいた活動や政策が実施されることを目指しています。実施3年目となる本年度は事前レポートとアクションプランの発表会を一般公開発表会として、実施しました。



高校

約1,500人が参加した夏のオープンスクール。体験入部にも200人の中学生が来校し学校生活の一部を体験しました。

7月25～27日の3日間オープンスクールを、8月16日には体験入部を実施しました。オープンスクールは、吹奏楽部によるウェルカムコンサートで幕を開け、本校生徒による「常磐のここがおすすめ」「制服紹介」「部活動ユニフォーム紹介」などを披露。その後、スタンプラリー形式での校舎内見学や13種類の中から自分の選んだ体験学習をし、常磐での高校生活の一部を体験していただきました。体験入部は、猛暑の中10団体の部活動で実施され、本校生の部員と一緒に汗を流して、高校の部活動を体験していただきました。



幼稚園

初めての「地震時保護者お迎え訓練」で園児全員が無事に避難。緊急時の対応が再確認されました。

6月の避難訓練では保育時間内での地震発生を想定し、初めて参加した年少さんも机の下に頭を入れ、避難終了の声がかかるまで、真剣に参加することができました。2回目となる9月18日には地震などの自然災害時に、園から緊急連絡を配信し、安全かつ確実に子どもたちを保護者に引き渡すための訓練を行いました。初めての試みでしたが、途中、年長さんが年中・年少さんの手を引き一緒に歩いてあげる頼もしい姿も見られ、成長を感じました。今後も緊急時に備えた訓練を計画していきたいと考えています。



智学館

いつもとは違う雰囲気の中、緊張感に満ちた夏季ゼミ合宿で、確かな手応えを感じた生徒たち。

7月22日～24日、5年次生34人が参加した夏季ゼミ合宿を行いました。常磐大学合宿所に宿泊し、授業は常磐大学の教室をお借りしての合宿です。宿泊室の消灯は22時でしたが、日付が変わる頃まで自習室で学習を続ける生徒も少なくありませんでした。「朝の自習があんなに充実するとは思わなかった」「テレビも携帯もその存在を忘れていました。時間が過ぎるのがとても早かったです」「またこんな合宿があったら、絶対に参加したいと思います」など、合宿後、確かな手応えを得た感想が数多く寄せられました。

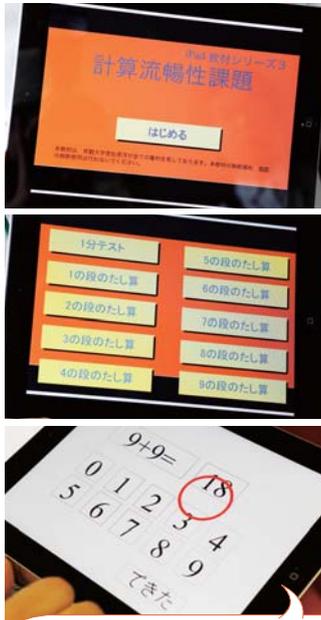


高校

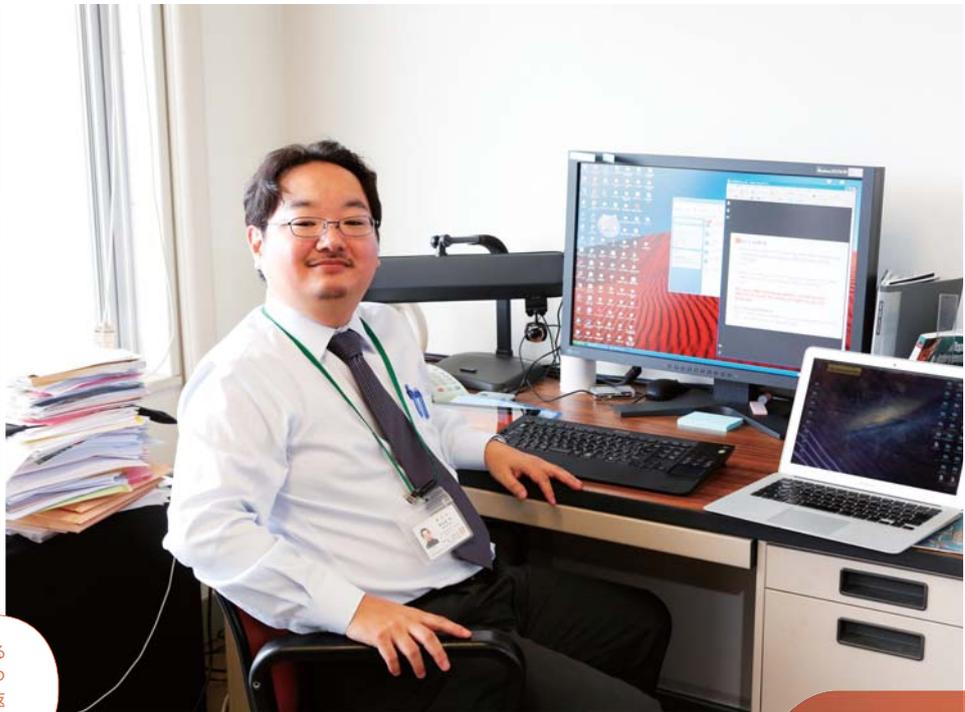
フランスから留学生がやってきました。「日本での学校生活は最高の冒険になりそう」とスピーチしてくれました。

「こんにちは、私はオロル・スベッグです。17歳の高校2年生です」。今回、常磐大学高等学校にやってきたのはフランスからの留学生。彼女は、小学生の頃から日本の音楽と文化に興味を持ち、日本に留学することが夢だったそうです。フランスには制服がなく、教室での飲食も禁止。部活動もないということで学校での生活は驚きの連続。「でも、私は日本の高校が好きです」と続け、「クラスメートがとても親切なおかげで、最高の冒険になりそうです」と締めくくってくれました。スベッグさんは来年の7月まで常磐大学高等学校の生徒たちとともに学びます。

地域や世界で力を試し、さまざまな活動を通して実践的に学ぶ。また、優れた研究成果を社会に発信する。こうした学内外で行われている活発な活動にスポットを当ててご紹介します。



例えば「計算流暢性課題」では、正解すると大きな○や所要時間を表示。正確かつ素早くできるようになるまで、楽しく繰り返せる「しかけ」がされています。



Spotlight  
**01**  
研究室

## 「学ぶ仕組み」を理解し、プログラムに生かすことで発達障がい児の学習を助けるシステムを研究しています。

人間科学部 総合講座 助教 菅佐原 洋 博士(心理学)

研究テーマ：発達障がい児の読み書き支援に向けたe-educationシステムの構築と検討  
平成22～25年度 日本学術振興会・科学研究費補助金 若手研究(B)に採択

### 発達障がい児の学習支援システム構築に向けて

最近の文部科学省の調査で、普通学級に通う公立小中学生の6.5%に発達障がいの可能性があることが示されました。しかし、「読む・書く」が苦手、授業に集中できないなど、学びづらさを抱えている子どもへの対応は、まだまだ追いついていないのが現状です。

こうした課題に対して、学校や家庭での学習を支援するため、心理学に基づく「学ぶ仕組み」を利用した学習支援プログラムをパソコンやインターネット上で作成しています。その成果を実証していくことで、より多くの子どもが学びづらさを解消するシステムを確立することが研究の目標です。

こうしたICT\*技術を活用することには多くのメリットがあります。まず、学習は繰り返しが基本ですが、ICTはいつでも何度でも利用するため繰り返し学習のパートナーとして最適です。また、子どもたちが意欲的に学ぶためには、楽しく学べる工夫やうまくできた!という経験が必要になります。プログラムには、例えば、正解すると大きな○やその子が好きな画像が出てきたり、前回よりどれくらい速くなったかが示されたり、といったモチベーションや達成感を高める工夫を盛り込むこともできます。海外の研究では、脳の可塑性は若いほど高く、早期集中でプログラムに取り組むことで脳機能が改善した例も報告されています。その点でも子どもの年齢に合わせた、学ぶ楽しさが重要です。

### より多くの子どもたちが成長できるように

発達障がいの子どもの中には、筆記具をうまく扱えないことが学習の妨げになっている例は少なくありません。例えば、作文を学ぶことが目的ならば、苦手な鉛筆ではなく、ワープロなどのツールを使えば、学びやすいわけです。そこで現在は、パソコンだけでなく、携帯電話やスマートフォン、タブレットPCなど多様なツールへの移行も進めています。

併せて、これらの学習前後の脳機能の変化を測定・比較することで、プログラムの利用が脳機能や知的発達にどのような影響をもたらすかを調べています。さらに今後は、20～30人規模でこのプログラムを実施し、その有効性を検証するとともに、プログラムを経験した3ヵ月後、半年後の変化を見る長期的な追試も計画しています。

発達障がいは個別性が高いため、その子に何ができて何ができないかを専門家がアセスメントすることが欠かせません。しかし、その結果を踏まえた支援や教材を、すべての現場で用意することは困難でした。学習のメカニズムに関する知見をシステムに生かし、より包括的なプログラムを構築すれば、高度な専門知識がなくても、全国どこでも、誰でも、手軽に活用できる学習支援システムが完成します。それは、特別支援教育の理念に貢献する有効な方法の一つだと考えています。

\*ICT (Information and Communication Technology) …… 情報通信技術

## 1万点を超える応募を集めた作文コンクールで 智学館の生徒2人が優秀賞を受賞。

水戸市が主催する「わたしたちの平和」作文コンクールにおいて智学館の1年次と2年次の生徒が優秀賞を受賞。さらに「水戸市平和大使」に任命され、去る8月5日～7日、広島に派遣され、平和記念式典に参列し、広島平和記念資料館を訪問しました。



水戸市長から「戦争を体験した方々から直接お話を聞くことができる最後の世代かもしれない」と聞かされ、強く責任を感じました。



私の考える平和が認められて光栄です。  
広島で学んだことを友人にも伝えたいです。

高橋 マミ 智学館中等教育学校 1年次 (写真右)

広島原爆被害を調べるうち、現地に行けばもっと実感をもって理解できると思い、平和大使に参加したいと思っていました。受賞した作文は、いじめは絶対にあってはいけない、それは、いじめなどの小さな差別や争う心が戦争につながるから、という視点で書きました。自分の考えている平和について認めていただき光栄です。派遣された広島では、人々が今も深い悲しみの中にあることを知らされ、あらためて戦争はいけないと感じました。これからは私が広島で見たこと、聞いたことを、友人にも伝えていきたいと思っています。

この作文コンクールをきっかけに  
もっと戦争について学ぼうと思っています。

松山 実玖 智学館中等教育学校 2年次 (写真左)

幼い頃は戦争が怖くて目を背けていました。しかし今は不幸な歴史でも知る必要があると思い、このコンクールをきっかけに戦争と向き合う気持ちを作文にしました。広島平和記念資料館を訪れたとき教えていただいた言葉は「過去の人を救うことはできないけれど、未来の人を救うことはできる」というものでした。これは、平成19年度平和記念式典での子ども代表のメッセージだそうです。私にはまだ世界に発信する力はないけれど、戦争の正しい知識を得ることはできます。今後も戦争について学び、考えを深めたいと思っています。

## 常磐大学の教員が執筆した さまざまな分野の著書をご紹介します。



- ① 「法の支配」と国際機構  
その過去・現在・未来
- ② 渡部 茂己
- ③ 国際学部 教授
- ④ 日本国際連合学会 編
- ⑤ 2013年6月
- ⑥ 国際書院

本書は、国連学会が学会会員による論文を数点厳選して毎年1回刊行する『国連研究』第14号であり、国際機構が政治権力ではなく、法に従って活動している状況を論じています。



- ① Multiple-Choice Tests in L2 Listening  
Format Differences in Questions and Options
  - ② 飯村 英樹
  - ③ 国際学部 教授
  - ④ 2013年9月
  - ⑤ LAMBERT Academic Publishing
- 国内外の英語テスト(TOEIC®、TOEFL®、英検等)のリスニングセクションの質問文と選択肢に焦点をあて、それらの提示方法の違いが、テスト得点に与える影響を検証しました。



- ① 環境教育辞典
- ② 元木 理寿
- ③ コミュニティ振興学部 助教
- ④ 日本環境教育学会 編
- ⑤ 2013年7月
- ⑥ 教育出版

環境問題と環境教育、社会の持続可能性に関連する用語を収録。元木は越境汚染、海面上昇、可採埋蔵量、景観、ゲリラ豪雨、小水期、ヒートアイランド現象などについて執筆。



- ① 「秘書の仕事」がよくわかる引き継ぎノート
- ② 高橋 真知子
- ③ キャリア教養学科 教授
- ④ 2013年8月
- ⑤ 中経出版

ビジネス現場における「秘書業務の実際」を8人全員が役員秘書経験者により、ベテランが新任に引き継ぐポイントをまとめて生き生きと伝える本です。

- ① 著書名
- ② 氏名・所属・職位
- ③ 著者・編者等
- ④ 発行年
- ⑤ 発行所

# 寄付者ご芳名

ご厚情に深く感謝し、以下のとおりご報告いたします。(敬称略)  
[2013年7月~9月受け付け分]

## ● 諸澤幸雄奨学金制度の創設・充実

企業	芳名のみ公表	金額
(株)坂場商店*		
山三印刷(株)*		
常磐大学同窓会 会長 池田 正則		3,000,000円
森 征一*		1,500,000円
竹中 治利*		530,000円
中村 和彦*		285,000円
富田 恭平*		100,000円
関 敦央*		90,000円
大槻 行徳*		44,000円
久松 雄大*		39,000円
坂井 知志*		
石田 喜美*		
江原 麻子*		
菅野 弘久*		
関 いつみ*		
田邊 正*	芳名のみ公表	
千葉 茂*		
飯村 雅明		
平塚 修一		
渡部 茂己		

**累計寄付金額 79,633,026円**

●複数回お申し込みくださいました方は芳名に\*を付し、金額は累計額を表示いたしました。

## ● 常磐大学における地域金融に関する教育研究の奨励

[2013年度実施事業分]

水戸信用金庫	1,553,575円
--------	------------

**累計寄付金額 6,000,000円**

### 寄付のお願い

開学100周年記念事業募金へ寄付を賜り、誠にありがとうございます。本学では諸澤幸雄奨学金制度を創設し、その充実および継続的運営を目的に2009年11月から募金を開始しました。この間、多くの皆さまよりご寄付を賜りました。重ねて御礼申し上げます。本学では、この制度をより充実させるため、引き続き募金の受け付けをしております。ぜひとも募金の趣旨をご理解いただき、ご寄付を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

### ★寄付金の申し込みおよび問い合わせ

学校法人常磐大学 会計経理課 寄付係

tel: **029-232-2759** e-mail: **kifu@tokiwa.ac.jp**

※寄付募集の詳細については、ホームページをご覧ください。

### アンケートご協力をお願い

- ①印象に残った記事とその理由など
- ②今後、広報誌で取り上げてほしいテーマなど

皆さまからのご意見・ご感想をお寄せください。

※名前、住所、本学との関係(在籍者の場合、所属する学校名)も併せてご記載ください。

e-mail: **Kikaku@tokiwa.ac.jp**

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1

お寄せいただいた方に、抽選で20名様に常磐大学オリジナルグッズを差し上げます。



### 大学院・大学・短大

★ 幼教フェスタ ..... 12/22(日)



★ 創立記念日 ..... 1/25(土)

★ 国際被害者学研究所共同セミナー ..... 2/9(日)

★ 卒業式・学位授与式 ..... 3/20(木)

### 高校

★ 吹奏楽部クリスマスコンサート ... 12/21(土)

★ マナー教室 ..... 1/22(水)

★ 保育系進学者ピアノ発表会 ... 2/15(土)

★ 卒業式 ..... 3/1(土)

### 智学館

★ 入試説明会 ..... 12/14(土)

★ 百人一首かるた大会 ..... 1/18(土)

★ 卒業式 ..... 3/2(日)

### 幼稚園

★ 育児に役立つ勉強会 ..... 1/22(水)

★ 発表会 ..... 12/7(土)

★ 春まつりの集い(観劇) ..... 2/28(金)

★ 修了式 ..... 3/18(火)

